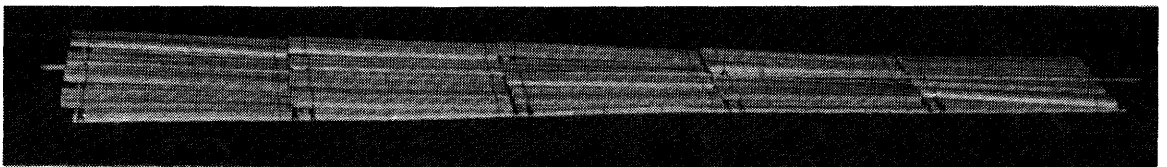


# 郷土あゆみ

郷土館だより  
第2号

五日市町立  
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069 有線4607

## 秋川の筏(いかだ)物語・明治大正期



### (1) 筏とは

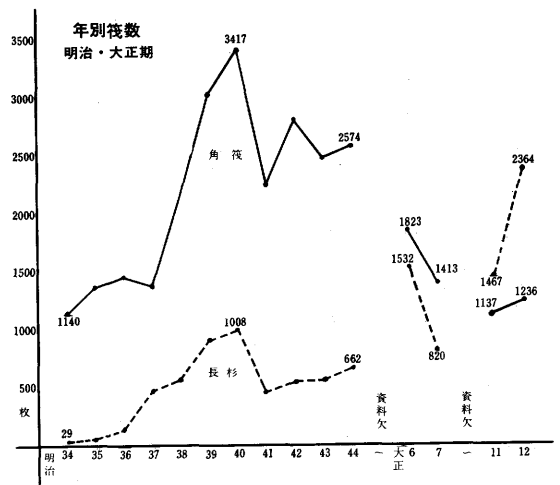
日本の河川は一部の大河を除き舟運の便が少なく、その代りに木材を筏に組んで流した。筏はしばしば上荷も乗せた。筏は舟と違って一方通行であるが上流地帯の物産を下流域に運ぶ重要な機能を果たした。川は筏交通によって上流地域の経済を育てる動脈の働きをなしたといえる。

秋川を下り、多摩川を経て六郷（多摩川河口）に運ばれる筏は江戸時代からおびただしい数量に達した。とくに江戸後期には植林の普及にともない杉、檜の規格化された筏が一定のルールに従って流されていた。幕府は登戸で運上（うんじょう・税・1枚につき永8文）を取ったので、その記録などから凡その数量がつかめる。幕末年間6000枚弱、うち秋川関係2000枚弱といったところである。（五日市町史参照）1枚とは明治期の規格でいえば1丈（3メートル）物の角材で20本前後の束を5つぎしたものである。従って本数で約100本、全長15メートルになる。現在のトラック一台分に相当する。

江戸時代の筏関係の文書には筏と用水堰のトラブル、あるいは洪水による流木事故などがしるされているが、詳しくふれる余裕がないので割愛する。

### (2) 筏と長杉

明治に入ると秋川流域では小宮領筏師組合という同業組合が結成（明治20年）された。五日市町戸倉の黒山儀



一郎家は代々組合長（頭取）をつとめていられた関係で組合の記録が保存されている。この文書から筏の数量を算出してみた。江戸時代の運上に代って徴収された組合の賦課金（敷引金）の日記簿によったので数字は正確と思われる。最高が明治40年の3417枚。その後漸減しているが、これは取引量の減少ではなく、陸送に移行したためである。長杉というのは足場丸太に使用する杉丸太のことで、高層建築の盛行とともに数量を増し、大正期になると角筏より多くなる。日本画の画題になる筏はこの丸太筏であるが、業者にとって筏といえば角筏であり長杉は筏あつかいしていない。敷引金も筏1枚20銭、長杉13銭（明治末）となっている。

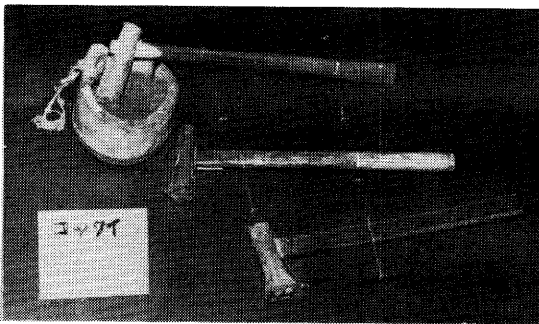
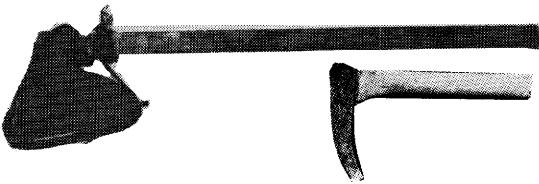
### (3) 土場と筏のつくり方

山で伐採した木は川へ落して一本ずつ流す。これを管流し(くだながし)という。管流しされた木材は土場(どば)と呼ぶ河原の広い所に引きあげられ、ここで筏に組まれる。五日市の土場は川上の落合川原から川下の山田の堰までの間に20~30か所あり、それぞれ習慣にもとづき特定の材木業者が専用していた。



●土場 この他十里木~沢戸橋間に7か所の土場がある。

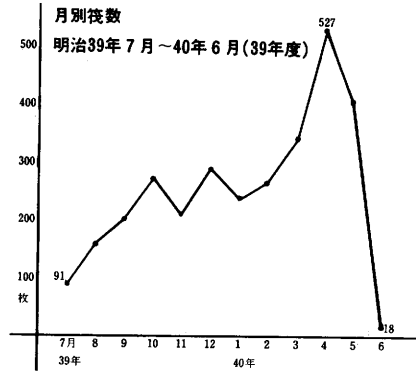
土場で丸太を角にするのは専門の杣(そま)職で一本一本ヨキで刻む。製材所の丸ノコにかけたりすると木肌がザラザラで砂が喰い込み、大工が困る。ヨキならすべすべで砂をかむことがない。次にメドキリでメド穴をあけ、ふじづるで横木にしぼりつける。また刻印(コックイ)という業者の商標を一本一本に墨で打ち込む。朝霧の立ちこめる川面をコンコンとメドを切る音が冴えて響く—これが秋川の一日の始まりを告げる情景だった。



### (4) 筏のシーズンと流失事故

筏を月別にみると、9月に始まり秋冬を通じて流され春の4、5月に最高に達し、6月に入ると停止されている。水量も豊富で好季節の夏を休止するのは農業の灌漑用水の為と夏季の出水による危害をさける為といわれる。

ところで休止期間中土場に溜った筏が8月末の大水に



流されることがよくあった。高い金を払った原木にさんざん人件費を注ぎ込んで仕上げた筏を流すことは業者に耐えられるところでない。流木被害は地もと材木商倒産の主要な原因となった。組合の事業報告書に、明治40年8月22日~24日大雨。50年来の大洪水。組合員の筏流失損害11万余円とある。また明治43年8月10日天明以来の大洪水と記し被害を報じている。組合は流木探索費や係争の為の訴訟費を支出しているが組合員の受けた打撃は深刻と思われる。

### (5) 筏の終末

明治41年度の小宮領筏師組合事業報告書は青梅線福生、拝島駅からの木材の鉄道輸送が7トン車511輛に達していると報じている。秋川方面から青梅線の駅までは馬力によったものであろうが、道路の改修、馬力車の改良が陸送の効率を高め、前述の40年、43年と続いた記録的洪水による筏の流失被害が陸送気運を促進したと思われる。大正末期にはトラック輸送がはじまり、追討をかけるように大正14年4月に五日市鉄道が開通した。江戸時代この方二百有余年つづいた筏の終りは河川交通の終末でもあり、筏によって生活していたさまざまな職業の人々に生活の転換を迫るものであった。

### (6) 上荷

話をもともとして、筏の上荷物についてみよう。明治期には上荷の荷主たちも組合をつくり、荷主組合は筏師組合の下部組織をなしていた。炭、杉皮、板貫類が乗せられ、僅少なが敷引金もおさめた。筏は相当な積載力もち、運賃も安かったであろうから、水に濡れてもよい、かさのはる商品輸送にはうってつけで

#### 上荷物数量表

(敷引金日記簿より)

	炭 俵	杉皮束
明治34	26,382	15,996
35	23,738	16,735
36	28,387	19,599
37	26,008	15,466
38	23,430	22,382
39	22,474	29,974
40	4,807	17,363
41	2,050	以下不明
42	447	
43	0	

ある。炭は年間2万〜3万俵、杉皮も2万束近くに達した。五日市の炭問屋が川崎地区の間屋と取引が多かった理由は一重に筏輸送の為であろう。

ところで筏の上荷輸送にはそれなりの欠点も多い、第一主体性がなく、安全性に欠ける。また送り先が多摩川下流域に限定される。それやこれやで鉄道の貨車輸送が発達するに従って、本体の筏より一足早く陸送へ移行していった。明治40年以後は殆ど姿を消し、組合の事業報告書に慨歎の声が聞かれる。

## (7) 筏師と筏乗り

筏師組合というのは地もとの材木業者の組合で、筏師は元締さんと呼ばれる有力者である。元締は山の立木を買取り、伐木一運搬一販売を自己の責任において行いその間各種の山林労務者を雇用する。筏師と筏の乗手を混同する人がいるが、乗手は正式には筏乗夫と称し、一般には筏乗りと呼ばれた。筏師は筏乗りの雇主である。



幕末から明治にかけて活躍した五日市町戸倉の有力元締儀三郎さん（黒山儀一郎氏曾祖父）は約半世紀にわたる日記を残しているが、その日記では筏乗りを乗子と呼んでいる。もっとも若き頃の儀三郎さんは自分も乗子に伍して筏に乗っている。

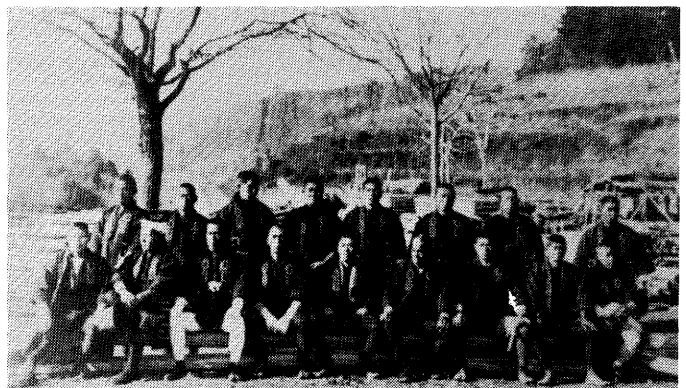
文久二年の日記を抜粋してみよう。( )内は注記。

- 1月26日 五日市下より山田(筏出発点)まで行。炭積申候。(この日は戸倉の自宅に泊る)
- 27日 内(戸倉)より出。山田より乗出し滝(八王子高月)泊り。
- 28日 滝より出。日野昼喰、押立(府中市)泊り。
- 29日 押立より出。まり子泊り。
- 30日 丸子より出。平にて油屋へ杉皮売。其時より大風にて砂利河岸泊り。
- 2月1日 南川原(川崎市)にて荷物揚る。其より車地

蔵へ泊り。

2日 朝より雪降り。車地蔵より田堀へ廻り、粟を買って内まで帰る。

山田を出発してより往路5日、帰路1日である。泊りは岸辺に筏をつなぎ、川端の筏乗り専用宿＝筏宿に泊った。年間数千枚の筏が流れるのだから筏宿は結構繁昌したと思われる。今でいえば民宿風の宿であつたらしい。風や雪に悩まされながらの強行軍で体力を消耗したはずの儀三郎さんは、驚ろいたことに翌3日またまた戸倉から筏を乗り出している。儀三郎さん血気盛んな頃であるが、例外的な乗り方である。中年になると彼は殆ど筏に乗らない。その代り、時には自分の筏を見送った後歩いて府中にゆき筏の到着を迎え、夜乗子たちをひきつれて遊んでいる。府中には遊郭もあった。彼は翌朝乗子の出発を見とどけ、自分は東京深川の木場へ向って立っている。乗子たちは六郷で(ときに羽田浦で)筏を木場の手のものに引渡し、五日市まで川沿いの道を歩いてもどった。中には府中で泊った者もいたかもしれない。これは財布との相談であるが、乗子は往復一週間分の日当、宿泊代を貰っている。収入は一般の日雇の3倍を超えたようであるから、ふところは温かかったはずである。筏乗りの歩いた川沿いの道は、筏道と呼ばれたが今はきれぎれでわからない。



大正時代の筏乗りの人たち

## 番場・近途・城腰 (郷土館周辺の地名)

郷土館運営協議会委員長 並木米一

五日市郷土館のある所、今は栄町などとありふれた町名になっているが、元は番場であった。番場は関所的な番所や調馬に使った馬場の意味がある。五日市の場合後者と思われる。郷土館の裏あたりは「ちか」と(近途)といわれ、ちかとは裏手の道「からめて」を表わしている。また高校運動場あたりは「もがり」と呼ばれ、上町寄りには城腰(じょうのこし)といわれた。明治20年代の書類には残って

いる。

もがりとは竹矢来を意味し、いずれも武家館(やかた)や番所に関係することばで歴史的なおいを漂わせている。五日市だけにあることばではない。

郷土館は主として有形文化財の展示の場であるが地名は無形文化財であり、大切にすべきものである。

郷土館設置の環境は、このような歴史的雰囲気のあるところ 偶然にもふさわしいところであった。

## 郷土館だより

## 秋の行事

### ○ 新旧町並み写真展 予定10月～

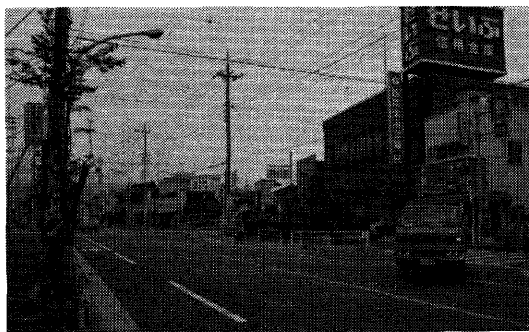
五日市の大通りは建築雑誌を切りぬいたようなお店や住宅が並び、歩道も広くなりました。住民の暮らし方や気持まで変ってきたようです。古い酒を新しい皮袋にもるとい言葉がありますが、消え去った古い町並みの中に 伝統の面影を探してみませんか。

(古い町並み写真をお持ちの方はご一報下さい)

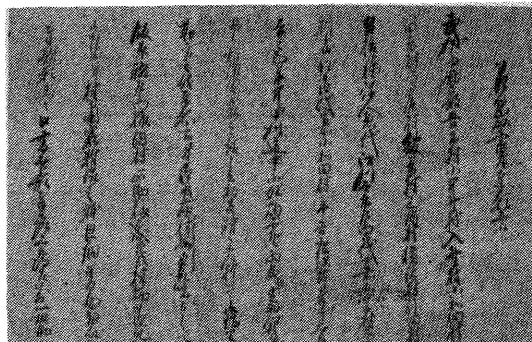
### ○ 古文書の読み方講座 10月～12月10回予定

(初心者向き ・ 講師 石井道郎先生)

昔の字は読めないという方が多いですが 同じ日本人の書いた日本語です。少ししんぼうすれば読め出します。ちょっとでも読めると面白くなり、また勉強したくなります。郷土史も自分で研究できます。この講座は入門講座ですから どなたもお気がねなく参加できます。



東町の今昔 昭57・37・12



江戸時代の歎願書

